



ニーズ (needs /ni:dz/) という言葉は、非常によく聞く。need の [複数形] で **必要なもの**、**入用**、**要求** くらいの理解が一般であろう。例えば、社会のニーズと言え、社会の要請と考えられ、保護者のニーズと言え、親御さんからの要求となろう。今の社会や教育を考えれば、その要求されるものや期待されるものは大きい。むしろ、プレッシャーに近いかもしれない。

本論の「子どものニーズ」と考えた場合、この意味は子どもの要請や子どもの要求となろう。では、子どもの要請や子どもの要求とは何か。「先生、遊び時間を長くしてください。」「先生、宿題を出さないでください。」なども、確かに子どもの要請・要求である。しかし、このような勝手なわがままを子どものニーズと呼ぶつもりはない。あくまで子どもの教育的ニーズ (求め) ととらえたい。

この子どもの教育的ニーズ (求め) とは、子どもの現段階での力と到達できそうな力との間 (ギャップ) のことである。単元の最初に、いろいろな視点から子どもの実態を把握し、最終的にはここまで到達できるように目標を設定するのが教科指導における授業づくりの基本となろう。この最初と最終との間 (ギャップ) を埋める計画が単元計画であり指導計画である。したがって、子どもの教育的ニーズ (求め) は、教師によって把握され、学習者本人がいつも自覚しているものではない。

このように考えると、学級目標と学級経営との関係も見えてくる。担任は4月段階の子ども実態を、例えば、昨年度の学級経営案や引継ぎ文書、観察、アンケート等から評価検討を行い、学校教育目標や学年目標との関連を考えて学級目標を設定する。この4月段階の子どもと学級目標の到達点の間 (ギャップ) が子どもの教育的ニーズであり、そのギャップを埋めるのが学級経営案と年間指導計画である。学級目標は、子どもと教師が4月から3月までの単年度で評価する時限目標とも考えられる。まさに重点的な目標であり、評価に耐えられなければならない。

これまでのことは、そっくり、そのまま学校教育目標と教育課程との関係でも言える。どこかの学校教育目標のように究極の目標を掲げ、評価しようにも評価が困難ではないかと危惧する。これまでは、究極目標であっても方向目標であってもよかったが、「子どものニーズ」を考えればお題目目標や曖昧目標は、これからの学校目標には必要はない。

特別支援教育の分野では個別の支援計画が作成され、左記の考え方は常識となっている。